

主日礼拝説教

2017.4.23

『彼の打ち傷によって』

復活節第一主日

ヨハネの福音書 20章19~23節

和泉聖書教会

牧師 五十嵐 賢志

新約聖書 ヨハネの福音書 20章19~23節

その日、すなわち週の初めの日の夕方のであった。弟子たちがいた所では、ユダヤ人を恐れて戸がしめてあったが、イエスが来られ、彼らの中に立って言われた。

「平安があなたがたにあるように。」

こう言ってイエスは、その手とわき腹を彼らに示された。弟子たちは、主を見て喜んだ。イエスはもう一度、彼らに言われた。

「平安があなたがたにあるように。父がわたしを遣わしたように、わたしもあなたがたを遣わします。」

そして、こう言われると、彼らに息を吹きかけて言われた。

「聖霊を受けなさい。あなたがたがだれかの罪を赦すなら、その人の罪は赦され、あなたがたがだれかの罪をそのまま残すなら、それはそのまま残ります。」

梗概

序

- I. 刺し傷を見て喜んだ
- II. 赦しの宣言
- III. 新たないのちへの再創造

結

序

復活祭の主日から一週間が経ちましたが、朗読された箇所のみことばは、まだ主の復活された当日に留まり続けています。一度では到底語り尽くせないキリストの復活という出来事。

復活は、私たちの信仰の根幹です。立ち止まって、じっくりとなぞっていくことには深い意義があります。

復活の主にお目にかかった弟子たちに、私たち自身を重ねながら、この出来事をひとつひとつ追体験していきたく思います。

I. 刺し傷を見て喜んだ

「平安があなたがたにあるように」

これが「弟子たちの集い」で発せられた復活のイエスのことばです。勿論、マグダラのマリヤの名を呼んだり、墓を訪れた女たちに「おはよう」と言ってあいさつを交わすということはありませんが、

弟子たちが集った場においてはこれが最初です。

この日は「週の初めの日の夕方」(19節)のことですから、歴史上最初のイースター礼拝と言ってよいでしょう。ユダヤの一日は日没から始まりますから、土曜日の夕暮れから主の日が始まっているとすると、日曜日の夕方というのは随分始まりが遅いように思います。あのゲッセマネの園での主イエスの逮捕以来、弟子たちは恐れをなして逃げておりました。散り散りばらばらであったのでしょう。仲間といっしょにいれば見つかりつかさずかもしれない。そんな恐れゆえに隠れていて集うことを避けていたのかもかもしれません。この日の朝、墓は空っぽで主の亡骸はなくなっていてペテロもヨハネもそれを目撃しています。マグダラのマリヤやほかの女たちはイエスにお会いしたと言うし、捉え難い事からのゆえにそういう情報を聞きつけた者たちがひとりふたりと集まってきた、というところだったのではないのでしょうか。おおかた集まったのはもう夕暮れ時であった。それだけ彼らはみな怖かったのだと思います。その背後で、最初の復活日礼拝に集う弟子たちを、主ご自身が集めておられたということなのかもしれません。墓に来た女たちに始まり、マグダラのマリヤ、そしてエマオのふたりの弟子、シモン・ペテロ。彼らはそれぞれよみがえられた主にお目にかかり、ほかの仲間たちも集めて夕暮れ時になってようやく集えたのです。

ですから歴史上最初のイースター礼拝は恐れに身を包まれて集うところから、いやその恐れによって凍てついたその心が主によって解かされることから始まったと言えるでしょう。

「平安があなたがたに」というこのことばとともに、イエスが何をなさったのかに目が留まります。「こう言ってイエスはその手とわき腹を彼らに示された」(20節)。その手とは十字架につけられたときに

釘を刺された手のひらであり、そのわき腹とは槍を突き刺され血の水が流れ出たその場所です。よみがえってすっかり傷が癒えたところを見せたのでしょうか。これについては、はっきりとしたことは書かれていません。けれども、この後トマスが「その手に釘の跡を見…指を釘のところに差し入れ…手をそのわきに差し入れてみなければ信じない」と言っていることからすると、おそらくイエスがこのとき弟子たちに示したのは釘を打たれた跡であり、槍で刺された傷であったと考えるのが妥当なところでしょう。治療が施され癒えた傷ではなく、生々しい傷であったと思われます。

傷跡を見るということはどんな思いがするものなんでしょうか。

例えば、娘の胸の手術痕を見ると生後数ヶ月で心臓の手術をしたときのいろんなことが、走馬燈のように思い起こされます。あの重い病が癒やされ、今はこんなに元気になったということを思います。

けれども、若い頃に大けがをした傷痕を見ると、けがをした瞬間のことがフラッシュバックしてきて、冷や汗の出る思いがいたします。

それぞれの傷痕には、それぞれに象徴的な何かが刻まれているのです。

誰かにけがをさせた傷であつたらどうでしょう。それも、たまたま目に入ったというのではなく、その人から見せられたのなら、傷を負わせてしまったその呵責ゆえに傷痕から目を背けたくなるのではないのでしょうか。

あの夜、逮捕されたときに身を挺してお守りしていれば、十字架にかけさせずにすんだかもしれない。少なくとも逃げ出さずにおればこれほどの呵責に苛さいなまされることはなかったのではないか。そうです。十字架につけられ死んだままのイエスであればそうでしょう。しかし、復活はそのような悔やむ気持ちを凌駕するのです。

イエスが釘の跡とわき腹の刺し傷を見せたときに「弟子たちは、主を見て喜んだ」（20節）のです。

傷は残っているけれど命は取り戻せたのだから、「良かったですね」というそんな程度のもではありません。主は「平安があなたがたにあるように」と言って傷痕を見せられました。復活のからだに生々しい傷痕が残っており、それを見たことによって彼らに平安が訪れ、喜びが生まれたということなのです。

^{いにしえ}古の時代に預言者イザヤが御霊に示されこう記しました。

彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。

（イザヤ 53:7）

まさにこれです。「彼の打ち傷によって、私たちはいやされた」というのは、理屈ではないのです。はるか昔に語られた預言者のことばが、今まさに「この私に起こった」ということに他なりません。

実にこの平安は、神の御子イエスが私たち人間の身代わりに神の懲らしめを受けたことによってもたらされたものだったのです。ですから、その傷を見せられたことによっていやされ、それを見た弟子たちは罪の赦しを得たのです。

II. 赦しの宣言

理屈ではない。けれどもあえてこう問いたいのです。

なぜ「彼の打ち傷によって、私たちはいやされた」のでしょうか。

古来よりユダヤ人は犠牲祭儀を繰り返してきました。罪を犯したことの悔い改めをするときに、その人は、自分が飼っている羊の群れの中から傷のない子羊を連れてきて、罪の身代わりとして捧げるのです。その人は、この子羊を祭司の前に連れて来て、この子羊に手を置き、自分の犯した過ちをなすりつけるのです。誰かのせいにすることを責任転嫁と言いますが、まさにそのように自分の罪をこの子羊に転嫁するのです。すると祭司が子羊を屠り、血を注ぎだし、肉は切り分けて祭壇で焼き尽くして煙にするのです。こういう犠牲祭儀を何度も何度も行ってきました。けれども、動物のいのちでは身代わりにはなりません。これらのことは、本物が来るまでの影のようなもの、罪の呵責は気休め程度にしか癒やされなかったことでしょう。

しかし、「世の罪を取り除く神の子羊」がやって来て、十字架につけられ、死んで葬られることによって、本物の犠牲として捧げられたのです。

そして、屠られた子羊であるこのお方は、よみがえられたのです。パウロはこう語ります。

「もしキリストがよみがえらなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお、自分の罪の中にいる」

(Iコリント 15:17)

もし仮に、キリストが復活されず死んだままであったとするならば、私たちの罪が本当に赦されたのか、どうしてわかるでしょう。死んだままでいると言うことは、死に続けているということでもあるわけですから、私たち人間の罪の処理のためにそれを継続しているということになります。

復活とは、十字架の死が完了したということの意味します。私た

ちの罪の刑罰がやんだ、もう終わったということです。

「平安があなたがたにあるように」

という主のおことばは、実に、十字架によって罪が完全に罰せられたことによってもたらされた、恵みの赦しの宣言でした。だから、彼らはその御傷を見て喜んだのです。

Ⅲ. 新たないのちへの再創造

「もう一度、彼らに言われた」（21節）とあります。「平安があなたがたにあるように」と、もう一度、主は彼らにお語りになったのです。

なぜ「もう一度」なのか。

そもそも、二度も語られたその「平安」とは何なのでしょう。

「平安」と訳されるこのことばは、時に「平和」とも訳されます。ヘブル語の「シャローム」から来ているのですが、辞書ではこんな説明がなされています。

「神から人に与えられる究極の平和＝シャロームとしてのキリストの救いが豊かに諸君のものであれ…と祝福を与え、またその確実な所有を断言しているものと理解される」（ギリシア語小辞典 [εἰρήνη]）

キリストの救いそのものがシャロームなのだ、ということ。そのことばが、イエスご自身の口から弟子たちに二度語られたということに意味があります。

一度目は、手と脇腹の傷痕を見せながら、

「この平和が確かにあなたがたのものなのだ」

と主ご自身が宣言しておられる。

二度目は、

「この平和が確かにあなたがたのものなのだ」

と弟子たちに宣言させるのです。この務めに弟子たちを派遣されたということです。

息を吹きかけて「聖霊を受けよ」というこの行は、最初の人アダムを思い起こさせます。「神である主は土地のちり^{くだり}で人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた」(創世記 2:7) といいます。「息」というこのことばは、御霊とも訳されます。

つまり、復活の主イエスが、復活のいのちの息吹を吹きかけ、新たないのちに生きる再創造をなさったということです。

そのいのちで生き始めた者たちは、十字架を示しつつ罪の赦しを説くのです。

「平安があなたがたにあるように」

というキリストのことばを互いに交わしながら共に生きるのです。

結

キリストの復活のおからだには、十字架につけられたときの痕跡がしっかり残っています。再臨の時、主が天から降りてこられ、私たちが引き上げられるとき、私たちもその傷痕を見て喜ぶでしょう。

ですから、私たちが、今後、どんな罪の重みに耐えかねるときでも、希望の一筋の光をいつも見いだすことができるのです。過ちをくよくよして立ち止まるのではなく、失敗をも恐れず進んでいこうといたします。

この喜びを私たちから取り去るものは何もないのです。